

# エディトリアル

横須賀市立うわまち病院 小児医療センター センター長 宮本朋幸

胸痛は、日常診療の中でよく遭遇する症状である。それは、重篤な疾患の症状の一つであることも多い反面、さまざまな原因で起こることもあり、胸痛の鑑別診断は時に困難を伴う。今回の特集では、胸痛に対してのアプローチの仕方を、さまざまな分野の先生方から解説をいただくこととした。

まずは、総合診療医を代表して、廣瀬英生先生に総論としての「地域診療所における胸痛へのアプローチ」をお願いした。胸痛の性状を詳細に聞くことが重要とポイントにあり、一次診療の中で患者としっかり向かい合うことが重要であると指摘されている。

次項より、プライマリ・ケアで鑑別をされ、各専門医に引き継がれていった後の各領域の疾患について、解説をしていただいている。

循環器、呼吸器、消化器、整形外科、精神科と各領域の専門医の先生方をお願いした。それぞれが、第一線で活躍している方々である。専門医がどのように症候を捉え、診断を確定していくかのプロセスを読み取っていただきたい。いずれも力作ぞろいである。

最後に小児科領域となっているが、本企画の筆者の方々には企画のコンセプトだけをお話しし、自由に書いていただいた。集まってきた原稿を読んでもみると、総合診療で強調された詳細な病歴聴取と注意深い身体所見把握が、小児科領域でも強調する結果となった。私は小児科専門医で、小児循環器専門医であるため、小児科専門医から「小児の胸痛」のコンサルテーションをよく受ける。近年、小児科もサブスペシャリティが細分化され、「胸痛は循環器」という意識が小児科医も強い。小児科はどんなサブスペシャリティを持っていても「小児の総合診療医」であるべきと小児科学会は提唱している。そこで、小児であっても、病歴聴取と身体所見が重要であるということを強調した。そういった意味でも本企画は、本誌の読者には多い総合診療医の先生方のお役にも立てると思っている。

胸痛という、重要疾患につながる症候も、総合診療医と各専門医が連携を組むことで効率的で的確な医療を展開できることが本企画を通してご理解いただけることを期待する。